

# ハマの労務コンサル短信

## 〈No.44〉君が代を歌う姿に見た日本の未来

〈No.37〉退職代行という現象が突きつけるもの  
〈No.38〉厳しくなった年金事務所の社会保険調査  
〈No.39〉裁量労働制の議論を振り返る  
〈No.40〉裁量労働制の議論を振り返る2  
〈No.41〉改めて国民年金第3号被保険者制度を考える  
〈No.42〉AI時代の36協定の運用試案  
〈No.43〉カスハラ・就活セクハラ対策の留意点

ビー・エム・ピー株式会社 代表取締役 鈴木 雅一

### ※ 来年開催のワールドカップ

サッカーワールドカップが熱狂のなかで幕を閉じました。あまり知られていないようですが、来年、オーストラリアでラグビーワールドカップが開催されます。日本も参加します。筆者はラグビーが好きです。

ラグビーの日本代表の構成は、他のスポーツと比べると外国人選手が多いような感想を持っていますが、2023年のラグビーワールドカップでも、試合前、外国出身の選手たちが胸に手を当て、一生懸命に君が代を歌う姿を見て、胸が熱くなりました。生まれた国は違っても、自ら日本を選び、日本代表選手として戦う。その姿は、「日本人とは何か」を改めて考えさせてくれました。

実は、筆者は、あの姿に少子化時代の日本の未来を見ていました。

人口が減り続けるこれからの日本では、生まれた場所だけではなく、この国を選び、この国で学び、この国で働き、この国のために力

を尽くそうとする人たちを受け入れ、彼らとともに日本社会を築いていかなければならないと考えています。外国出身選手が君が代を歌う姿は、そんな日本の未来を象徴しているように思えたのです。

### ※ 「日本との結び付き」を重視

ところが、ラグビー界は今、外国人選手に「日本との結び付き」をこれまで以上に重視する方向へ制度を変えようとしています。外国人選手の日本代表資格の居住要件を3年から5年へ延長しました。さらに日本ラグビーのリーグワンでは、新しいシーズンから、外国人選手に対して日本での義務教育を一定期間受けた選手を優先するという新たな登録制度を導入しようとしています。

背景には、日本で育った選手を優先して育成したいという考えがあるようです。この狙いはある程度は理解できます。共感を覚えることもあります。しかし、本当にそれが日本ラグビーの発展につながるのかと言えば疑問です。

日本代表がティア1と呼ばれる世界のトップグループに肩を並べられるようになったのは、日本人だけで競い合ったからではありません。多くの外国出身選手が来日し、リーグワンの各クラブの中核選手となり、日本人選手とともに切磋琢磨することで、日本ラグビー全体のレベルが押し上げられてきました。世界中から優秀な選手が集まり、日本人選手と競い合う。その環境こそが、日本ラグビーを強くしてきた大きな要因ではなかったでしょうか。

日本代表となる外国人選手や日本のラグビーリーグであるリーグワンの外国人選手に対して「日本との結び付き」を重視する姿勢はそれなりに意味があるとは思いますが、しかし、結果として日本に来て日本代表として頑張りたい外国人選手に対して、日本は門戸を狭めてしまうようになり変まりました。これが日本ラグビーの未来につながるのか。筆者には少し気になります。



● 鈴木 雅一（すずき まさかず） [www.pmp.co.jp](http://www.pmp.co.jp)

■ 本社所在地：〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい2-2-1 ランドマークプラザ5階

ビー・エム・ピー株式会社（PMP）代表取締役・特定社会保険労務士。慶應義塾大学経済学部を卒業（専攻は経済政策，恩師はカトカンで有名な加藤寛教授）。三菱銀行（現三菱UFJ銀行）に入社し，人事企画部門他を経験。その後，米国ケミカル銀行（現JPモルガン・チェース銀行）の日本支店の副社長として銀行と証券人事部門を統括。米国マイクロソフト社の日本法人であるマイクロソフト株式会社の人事部門と総務部門の統括責任者を経て，PMPを創業。また，人事部長のネットワークSMCも運営，人事スペシャリストの研鑽の場を提供している。著書に『アメリカ企業には就業規則がない』（国書刊行会）。

## ＊在留資格制度の見直し

視点を変えると，日本社会全体も今，同じ方向へ向かっているように感じられます。政府は少子高齢化による人手不足を最大の課題だと繰り返しています。しかし，その一方で，日本に根を下ろそうとする外国人への制度規制は厳しくなっているように思えます。その象徴が，外国人経営者の在留資格制度の見直しです。

政府は，不正な在留資格取得や制度の悪用を防ぐため，外国人が日本で事業を営むための在留資格について更新要件を厳格化しました。1つの事例が，経営管理の就労許可要件である資産条件です。従来の500万円から3,000万円へと一気に6倍引き上げました。これまで制度を悪用する事例が散見されたための厳格化と説明されています。一定の厳格化は確かに必要だと思います。

しかしながら，この法改正は，制度を悪用してきた人に対してだけではなく，長年まじめに日本で暮らしてきた人たちにも大きな影響を与えました。

毎日新聞は6月9日の社説「在留資格の厳格化 社会の支え手が失われる」で，その象徴的な事例を紹介しました。

紹介されたのは，家族で来日し，小さな外国料理店を営んできた外国人経営者です。派手な事業をし

ていたわけではありません。日本人のお客様に母国の料理を提供し，地道な努力で店を軌道に乗せ，税金を納め，子どもを日本の学校へ通わせ，地域に根付き，日本で人生を築こうとしてきました。日本語を学び，日本で働き，日本で家庭を築き，日本で子どもを育ててきた人です。

筆者には，その人こそ「日本との結び付き」を体現している人にも思えます。ところが，制度改正によって，それまで対応できていた在留資格更新の条件を満たすことが難しくなり，閉店や帰国を考慮するを得なくなりました。

## ＊最大の課題にどう向き合うか

もちろん，不正な在留資格取得や制度の悪用は防がなければなりません。政府には外国人の制度の悪用を防ぎたいという理屈があります。ラグビー協会にも日本人選手を育成したい，外国人選手であれば日本との結び付きを重視したい，その一環として外国人選手にも日本での義務教育年数のある選手を優先したいという理屈がありました。

それぞれの制度変更には，それぞれの合理性があるのでしょうか。しかし，筆者には1つ欠けている視点があるように思えてなりません。それは，少子化という日本最大の課題に対する大局観です。

日本の人口は減り続けます。

生産年齢人口も減ります。

地域社会を支える人も減ります。

そのなかで，日本を選び，日本で働き，日本で家庭を築き，日本で子どもを育て，この国に根を下ろそうとしている人たちを，私たちはどう迎えるのでしょうか。

制度ごとの理屈だけで考えていて，本当に日本の未来は描けるのでしょうか。

高齢者の活躍も，女性活躍ももちろん重要です。しかし，それだけでは日本の人口減少を補えないことは，多くの人が感じているはずです。だからこそ，日本を第二の故郷として選び，日本社会の一員として生きようとする人たちを，もっと大きな視点で考える必要があるのではないのでしょうか。

来年のラグビーワールドカップでも，筆者はきっと，外国出身の選手たちが君が代を歌う姿に胸を熱くするでしょう。あの姿は，「日本人とは何か」を教えてくれるからです。その感動を，スポーツの世界だけではなく，日本の政策にも生かしてほしい。

少子化という日本最大の課題に向き合うとき，私たちに必要なのは，個々の制度の正しさだけではありません。日本をどんな国にしたいのか。その大きな未来図のなかで，1つひとつの制度を考える時代に来ているのではないのでしょうか。筆者は，そう願っています。